

第4節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

1. 医学部附属病院患者用・職員用立体駐車場建設工事に伴う予備発掘調査・立会調査

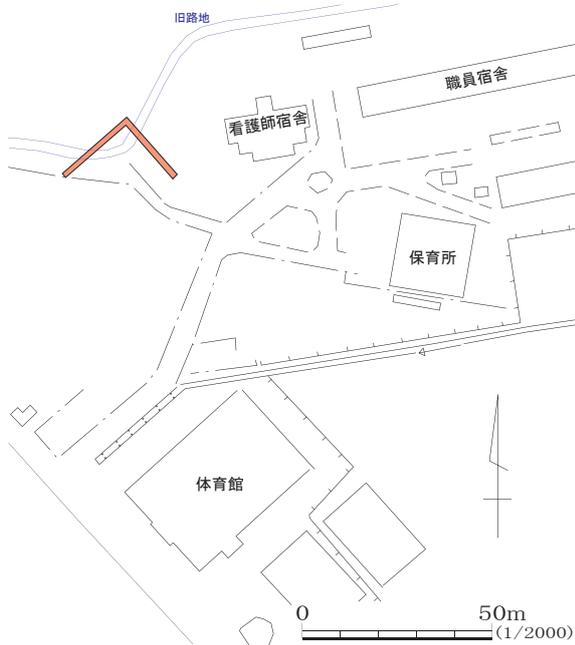


図 31 調査区位置図

調査地区 小串構内看護師宿舎南西側駐車場

調査面積 約125㎡

調査期間 平成22年5月10日～6月1日

調査担当 横山成己 松浦暢昌

調査結果

(1) 調査の経緯(図31・32、写真49・50)

小串構内北部、看護師宿舎南西方の駐車場敷地において、既存立体駐車場の解体及び新規立体駐車場の建設が計画されたことを受け(平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年3月18日開催にて承認)、新規立体駐車場建設予定地において予備発掘調査を実施する運びとなった。新営の立体駐車場は山口大学と(財)朋和会の敷地にまたがって計画されていたが、山口県教育委員会の指導により当館が調査を担当することとなった。

開発予定地周辺の既往調査では、現地表下0.7

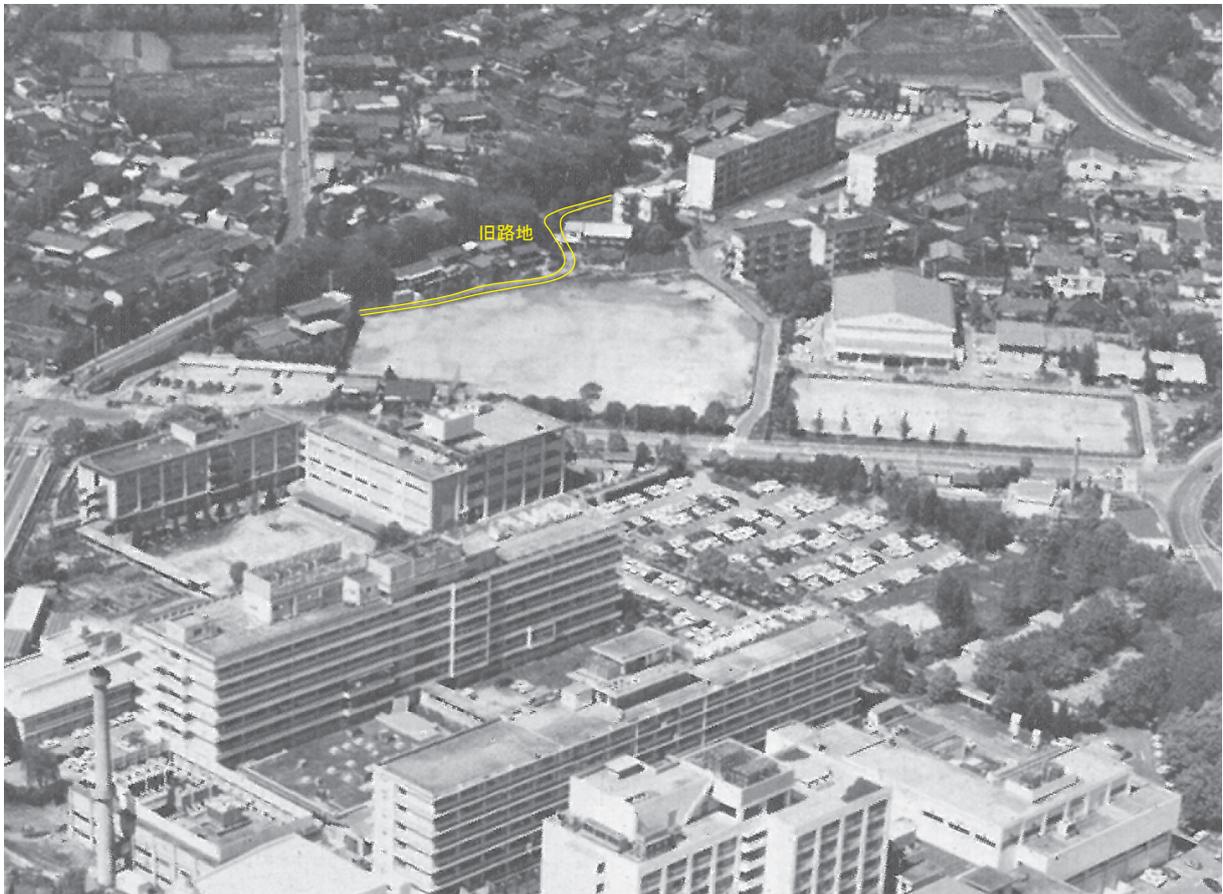


写真 49 昭和 58 年頃の小串構内北東部 (南西から)

m～1.5mに大学造成以前の耕土・床土が埋存し、その下位に砂礫層、海成砂層、海成粘土層等が堆積しており、それらはいずれも近世以前の遺物を含む遺物包含層であることが確認されている。^{註1}

今回の調査地は小串構内の北西部を北東－南西方向に伸びる丘陵の東側縁辺部と推定されたため、旧地図と写真を参考に、丘陵地(写真49の旧路地周辺)における遺構分布の確認と、丘陵から低地部への遺物の流入状況の確認を目的とするL字状トレンチを設定し調査を実施した(図32)。

【註】

1)横山成己(2006)「医学部職員宿舍他公共下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』,山口

(2)調査の経過

平成22年5月10日より調査に着手した。11日までに重機掘削を終え、12日に丘陵地の遺構検出作業、翌13日以降低地部に遺存する旧耕土(第2層)、床土(第3層)および堆積層(第4層以下)の検出、掘削作業を開始した。28日までに低地部堆積層の人力掘削及び丘陵地の攪乱坑埋土の掘削を終了し、31日に終了写真の撮影と調査区の平板測量、6月1日に調査区断面写真撮影と断面実測を終え、調査を終了した。なお、新規立体駐車場建設請負業者が発掘調査も担当したため、埋め戻し作業に当館は関与していない。

(3)層序(図33、写真53～58)

今回調査では最深部で地表下2.1mまでの地層を壁面で確認した。地層は7層に区分された。調査地北側に隣接する丘陵由来と考えられる基盤岩層は「岩盤」と呼称する。今回調査地ではトレンチ北側角

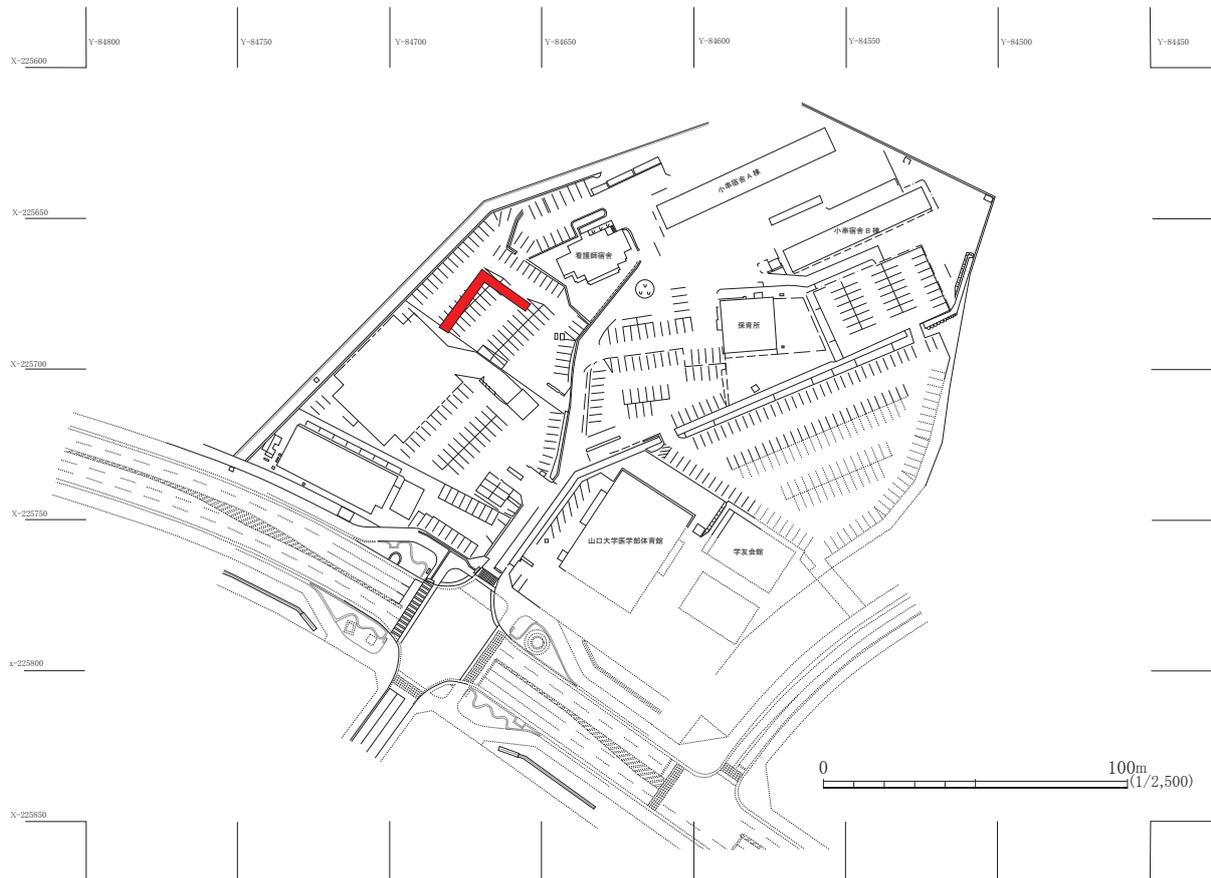


図 32 調査区詳細位置図

で地表下70cm付近に岩盤が露出し、南東・南西方向に低くなり、その縁辺から地層が南側に緩やかに傾斜して堆積する様子が確認された。

第1層は現代の整地土層で層厚は約0.5～0.9mである。

第2層はオリーブ黒～暗緑灰色の含細礫極細粒砂質シルト層で層厚はおよそ0.1～0.2mである。磁器片や踏込み痕、層直上の炭化植物遺体から、近代の耕土と見なされる。

第3層は第3-1層と第3-2層に分類される。第3-1層は灰色粗粒砂混じり極細粒砂質シルト層であり層厚は約0.15mとなる。上面では浅い溝状の凹みやそれに沿う杭跡がみられる。遺物は煙管の吸口や播鉢等の近世陶磁器類の破片が検出される。グライ化しており、上面からの植物痕が多く見られるほか干割れ痕が確認できる。第3-2層は灰～オリーブ黒色粗粒砂混じりシルト層で層厚はおよそ0.15～0.2mである。岩盤が風化した礫が少量みられる。上層からの植物痕が少量みられるほか、陶磁器片や土師器片が検出される。第3-1と共にほぼ均質な土質となることから、第3層は第3-1が水稻耕作時に攪拌された床土、第3-2が攪拌されずに遺存した床土となる作土層と考えられる。

第4層は暗オリーブ灰色シルト質極細～中粒砂層で層厚はおよそ0.05～0.15mである。固く締まった砂層で植物痕がみられ、岩盤が風化した礫と瓦質土器片、土師器片などの遺物が上面付近に散布する傾向が確認できる。下面は攪乱がみられ、自然堆積と考えられるが、上部は近世の土地造成のために削平された可能性がある。

第5層は灰色粗粒砂混じり粘土質シルト～暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂層～灰色シルト質細粒砂で層厚およそ15～25cmの水成層である。遺物の検出はなく、層中や下面に粘土の偽礫を含む生物痕が多くみられる。

第6層は暗オリーブ灰シルト質極細粒砂層で層厚は20cm以上となる。遺物は検出されなかったが、土質から平成16年度調査にて弥生土器の包含が確認された第6層に相当すると考えられ、汽水域付近での水成堆積層である。

第6層掘削中に地下から多量の湧水を見たため、堆積層の掘削は当層上面で止め、側溝を掘り下げることで層厚の確認を取ろうと努めたが、下層の確認には至らなかった。

【註】

1) 横山成己(2006)「医学部職員宿舍他公共下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』,山口

(4) 遺構(図33、写真51・59・60)

今回検出された丘陵部岩盤は、傾斜面と上面に大きく削平を受けており、岩盤上で確認されたのは攪乱坑だけであった。旧路地周囲の昭和58年頃の写真(写真58)を見ると、路地周囲には家屋が建ち並んでおり、これらの宅地造成時に自然地形の削平が行われたものと想像される。小規模の攪乱は完掘したが、大規模な攪乱は部分的に底を確認し未掘のまま残した(写真60)。岩盤上面こそ風化土となっているが、傾斜面を見て分かるように直下はほぼ風化が及んでおらず、極めて硬質である(写真59)。丘陵部岩盤は調査区外にも及ぶが(図33着色部)、岩盤上面に遺構が遺存する可能性は極めて低いと言わざるを得ず、これを根拠とし本発掘調査の実施を見送った。

一方で、第4層以下では岩盤の風化土と各層が混ざる様子が確認でき、調査地付近が丘陵と河口の接する環境であったことを推測できる重要な情報を得ることができた。

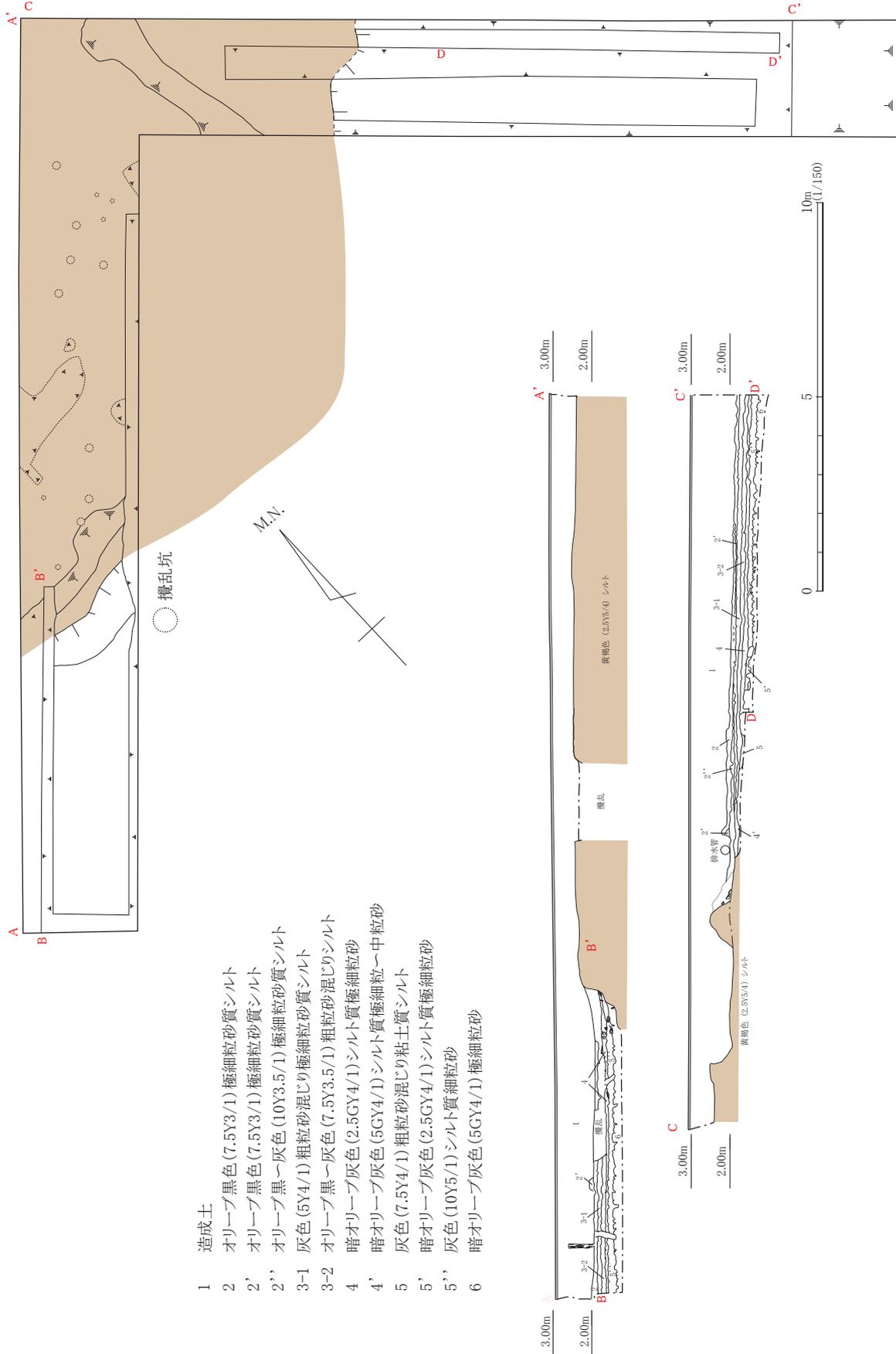


図33 調査区平面図・断面図



写真 50 調査前近景 (南から)



写真 51 地山検出状況 (北東から)



写真 52 作業風景 (北東から)



写真 53 北西-南東トレンチ第3-1層検出状況 (東から)



写真 54 北東-南西トレンチ第3-1層検出状況 (南西から)



写真 55 北東-南西トレンチ第4層検出状況 (南西から)



写真 56 第4層遺物出土状況 (南東から)



写真 57 北東-南西トレンチ北西壁土層断面 (東から)



写真 58 北西-南東トレンチ南西壁土層断面 (東から)



写真 59 調査区北端部岩盤露出状況 (北から)



写真 60 調査終了状況 (北東から)

(5) 遺物(図34、写真61・62、表3・4)

遺物の出土を見たのは、第2層(旧耕土)、第3層(旧床土)、第4層(自然堆積層)に限られ、第5層以下からは確認されていない。この内、第2層出土遺物は主として近代のものが多数であったため、ここでは報告を省く。第3層、第4層ともに近世と中世の遺物が混在しており、それ以前の遺物は少量である。

第3-1層出土遺物(図34-1・2、写真61)

1は煙管の吸口。真鍮製と見られ、羅宇との接続部に沈線を多重に巡らす。全長5.0cm、最大径0.8cm、重量4.04g。2はトキン高台の陶器底部片。高台は露胎で内面と外面体部に土灰釉がかかる。高台径4.8cmを測る。

第3-2層出土遺物(図34-3～10、写真61・62)

3は瓦質土器で、鉢もしくは鍋の口縁部片と見られる。口縁端部内面を肥厚させる。外面は風化が著しいが、内面にはヨコハケが施されている。4も瓦質土器だが、やや硬質に焼成されている。直立する頸部を有し、口縁端部外面を肥厚させる。内面にはヨコハケ、外面は頸部にヨコナデ、肩部にタテハケが施されている。5は青磁口縁部片。口縁を軽く外反させている。内面に連弁文と見られる加飾が施されている。龍泉窯系か。6は土師器甕口縁部片。小片のため口径不明。軽く外反する口縁であり、端部は丸く収める。内外面ともヨコナデが施されるが、内面には部分的にヨコハケが残る。7は土師器小皿。口径4.8cm、底径4.2cmに復元される。器高は0.9cmを測る。底部外面にわずかに糸切り痕が残る。8は瓦質土器足鍋の脚部片。土師質焼成となっている。内面には使用による煤が付着している。9も瓦質土器足鍋の脚部片である。脚端部をわずかに外方につまみ出す。脚部片側面に指痕が明瞭に残る。10は陶器皿か。露胎の高台は幅広で低く、高台中央がわずかにトキン状に膨らむ。内面は薄く灰釉がかかる。高台径は5.2cmに復元される。

第4層出土遺物(図34-11～17、写真62)

11は土師器鉢。口縁を「く」の字状に屈曲させる。口縁、体部とも内外面丁寧なナデ調整が施されている。12は瓦質土器の足鍋脚部片。鍋底接合部で剥離している。脚内面が二次焼成を受け赤化している。13は染め付け磁器の高台付き碗もしくは皿。内面は見込み部二重圏線の内部に草花文が描かれている。外面には高台部に粗雑な2条の圏線が、体部下半には連続して円形状の模様を描かれているが具体的には不明。高台は暈付釉剥ぎで復元径5.2cmを測る。14は瓦質土器火鉢の口縁部-肩部片。わずかに張り出す肩部から直立気味に頸部が立ち上がり、口縁端部は内外面とも肥厚させている。頸部外面に縦方向の沈線が加飾される。頸部・口縁部は内外面ともヨコナデ、肩部内面はヨコハケとヨコナデ、外面は横方向のミガキが施される。15は瓦質土器足鍋の底部-脚部片である。脚は根本付近で折損している。脚接合部外面はヘラ状工具で丁寧にナデが施されている。底部内面はヨコハケ後ヨコナデ。16は瓦質土器播鉢。体部内面はヨコハケをナデ消した後に7条または10条単位の卸目が施されている。見込み部には現状で4条の卸目が確認できる。外面調整はナデ。17は瓦質土器足鍋の脚部片。鍋底を取り込みながら破損している。脚内面に明確な二次焼成痕、煤痕は見られない。

第3層から第4層にかけては近世遺物を含んでおり、以前指摘したように第3層は本地を耕地化するための客土、第4層は近世期まで不安定であった真締川が上流から押し流した土砂と本川の氾濫等により削られた丘陵の岩盤風化土が混ざり合い堆積した層と見なされる。

【註】

- 1) 横山成己(2006)「医学部基幹整備(地下オイルタンク他)工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成16年度—』,山口

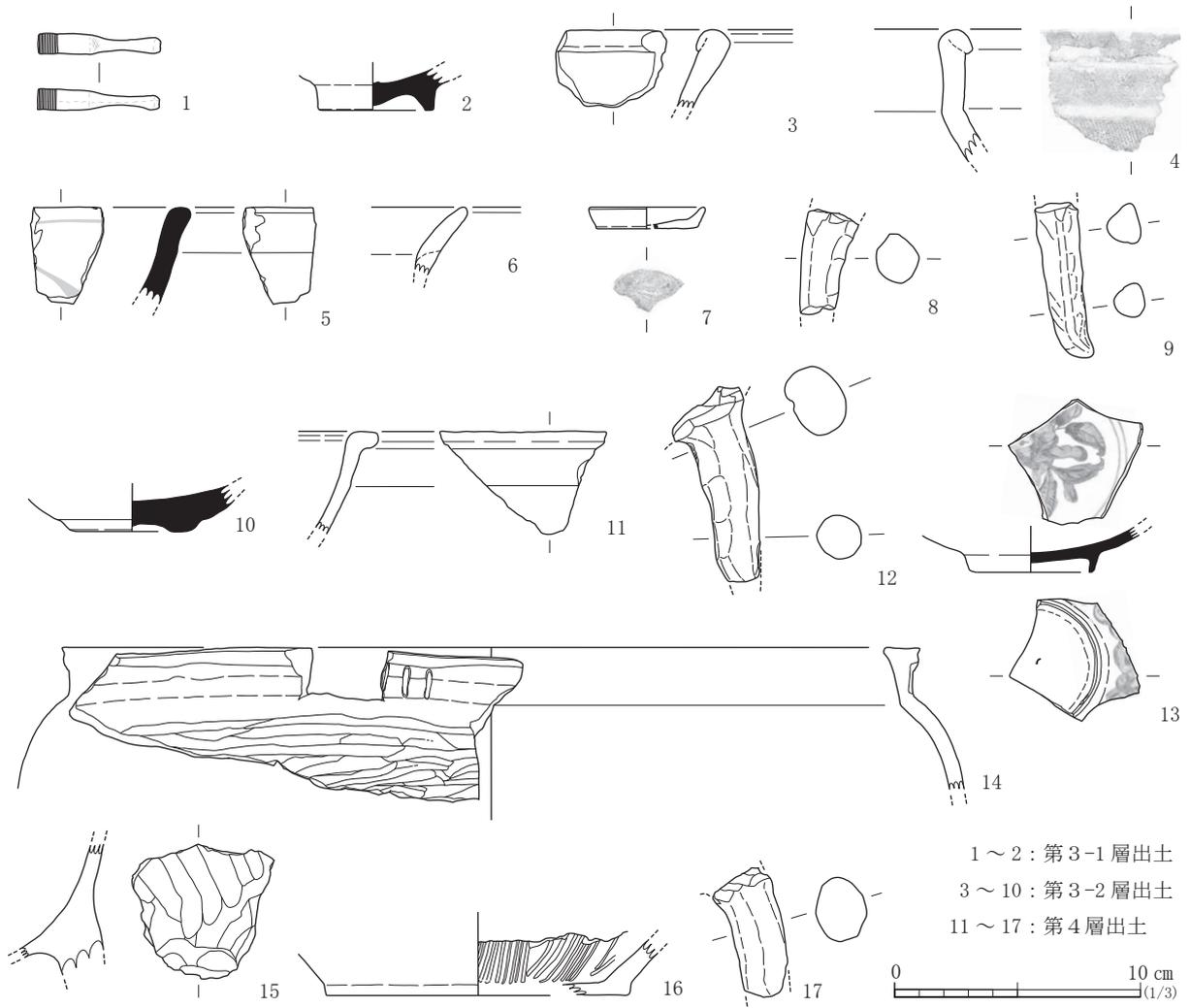


図 34 出土遺物実測図



写真 61 出土遺物①

小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査



写真 62 出土遺物②

表3 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
2	第3-1層	陶器 碗か	底部	②4.8		①にぶい赤褐色(7.5R4/3)~ 暗赤褐色(10R3/1)②深緑	1mm以下の砂粒を少量 含む	
3	第3-2層	瓦質土器 鉢か	口縁部			①灰色(2.5GY6/1)②灰色N4	1mm以下の砂粒を多く 含む	
4	第3-2層	瓦質土器 甕か	口縁部			①灰色(N6) ②灰白色(10Y7/1)	4mmの礫をわずかに含む 2mm以下の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を含む	
5	第3-2層	青磁 碗	口縁部			素地 灰色(7.5Y8/1) 釉 明緑灰(10GY7/1)	精良	龍泉窯系
6	第3-2層	土師器 甕	口縁部			①暗灰黄色(2.5Y5/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	2mm以下の礫・砂粒を多く含 む	
7	第3-2層	土師器 皿	口縁部 ~底部	①(4.8)②(4.2) ③(0.9)		①浅黄色(2.5Y7/4) ②浅葱色(2.5Y7/3)	1mm以下の砂粒をわずかに 含む	
8	第3-2層	瓦質土器 足鍋	脚部			にぶい褐色(7.5YR6/3)	2mm以下の礫・砂粒をわずか に含む 1mm以下の砂粒を少量含む	内側に煤付 着
9	第3-2層	瓦質土器 足鍋	脚部			灰黄色(2.5Y7/2)	2mmの礫をわずかに含む 0.5mmの砂粒を少量含む	
10	第3-2層	陶器 皿か	底部	②(5.2)		素地 にぶい黄色(2.5Y6/3) 釉 灰白色(2.5Y7/1)	0.5mm以下の砂粒を含む	
11	第4層	土師質土器 鉢	口縁部			①浅黄橙色(10YR8/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	2mmの礫をわずかに含む 1mmの砂粒を多く含む	
12	第4層	瓦質土器 足鍋	脚部			にぶい黄色(2.5Y6/3)	2mm以下の礫・砂粒を少量含 む 1mm以下の砂粒を多く含む	
13	第4層	磁器 碗か	底部	②(5.2)			精良	
14	第4層	瓦質土器 火鉢	口縁部 ~頸部	①(35.0)		①②灰色(N4)	1.5mm以下の砂粒をわずかに 含む	
15	第4層	瓦質土器 足鍋	底部~ 脚部			①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(7.5Y7/1)	2mm以下の礫をわずかに含 む 1mm以下の砂粒を多く含む	
16	第4層	瓦質土器 播鉢	底部	①(12.5)		①灰色(N4)②灰白色(5Y7/1)	2mm以下の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を含む	
17	第4層	瓦質土器 足鍋	底部~ 脚部			①灰白色(7.5Y7/1) ②灰色(N4)	1mm以下の砂粒を含む	

表4 出土遺物(金属器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
1	第3-1層	煙管 吸口	全長 5.0 最大幅 0.8 吸口径 0.6 重量 4.04g	

(6) 立会調査(図35・36、写真63～66)

予備発掘調査終了後、平成22年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会により当工事計画に対する埋蔵文化財保護対応は予備発掘調査に止めることが承認された後、ただちに工事が着工されることとなった。工事計画では、予備発掘トレンチの南西方向に連続して基礎坑が掘削されることになっていたため(図35、写真66)、予備発掘調査にて検出した層序の延長部を確認するため、掘削終了時に立会調査を実施することとした。

調査対象としたのは3箇所の基礎坑である。いずれも3m角で深度1.5mまで掘削が行われた。この基礎坑を北東から南西にそれぞれA調査区、B調査区、C調査区と定め、断面精査を行った。

調査の結果、各調査区において造成土下に

第2層:旧耕土である灰色・オリーブ灰色・オリーブ黒色のシルト

第3-1層:土壌化した床土である灰色粗粒砂混じりシルト質極細粒砂

第3-2層:床土である灰色・オリーブ黒色粗粒砂混じりシルト質極細粒砂または粘土質シルト

第4層:黒オリーブ灰色・緑灰～暗緑灰色細礫混じり細粒砂または中粒～細粒砂またはシルト

を確認した。土色、土質に微少な差はあるものの、予備発掘調査において確認された層序と同一と見なして良い。遺物に関しては、断面精査中にA調査区第3-2層より青磁の口縁部小片が、A調査区とC調査区の第4層より瓦質土器の体部小片が出土しているが、ここでは図示しない。

この他、9月6日に予備発掘調査区北端部コーナー付近の岩盤掘削工事中に立会を行ったが、地下2.2mまで同質の岩盤であった。ここでは断面写真の掲載を省く。

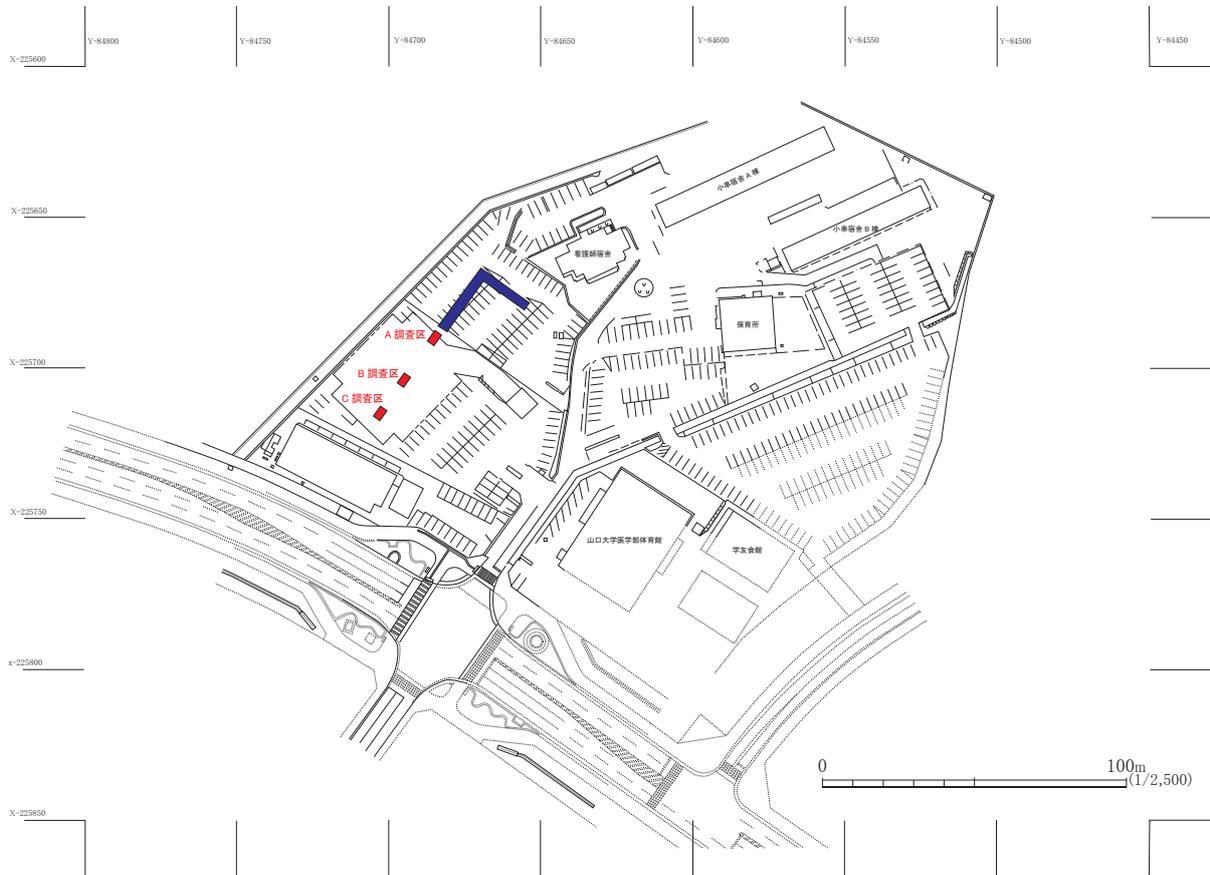


図 35 調査区詳細位置図

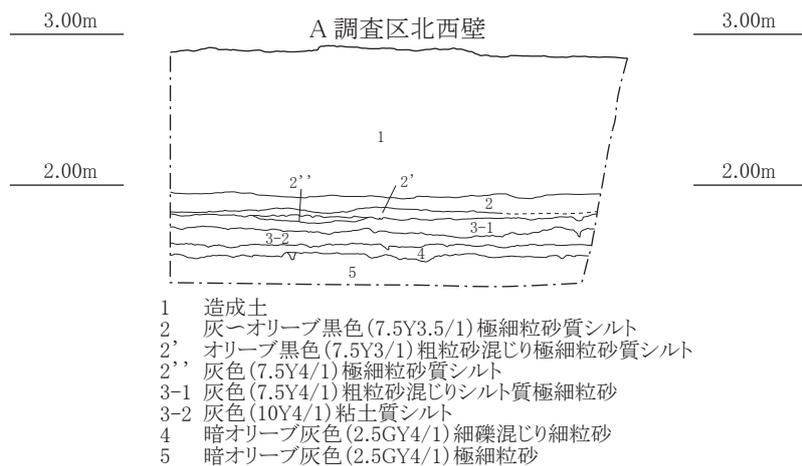


写真 63 A 調査区北西壁土層断面
(南東から)

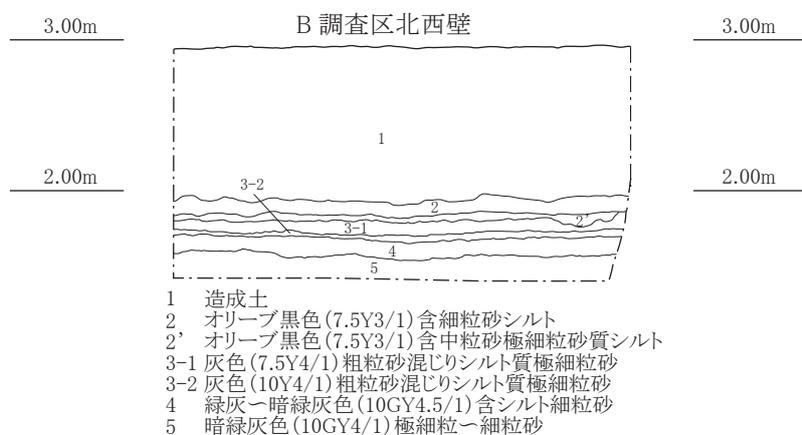


写真 64 B 調査区北西壁土層断面
(南東から)

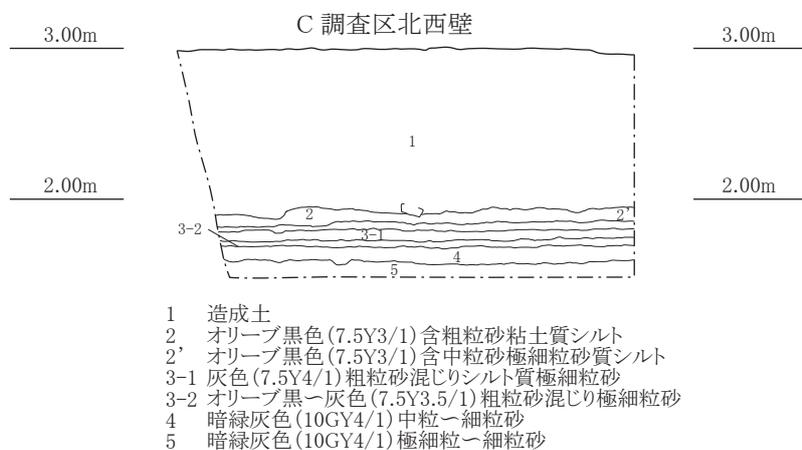


写真 65 C 調査区北西壁土層断面
(南東から)



図 36 A～C 調査区北西壁土層断面図



写真 66 調査地遠景(北から)

(7)小結

現在山口大学小串構内は、宇部市域を南北に流れる真締川の右岸に面して所在している。この真締川は、現在は小串構内東側からそのまま南進を続け河口へと至っているが、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向け、助田町(現JR居能駅南側)付近を河口としていたようである。近世文書「舟木宰判本控」に所収されている未ノ二月(寛政11年(1799)2月)の「御届申上候事」には、「宇部村福富前殿領本川筋砂余分流出、川尻は遠干拓にて砂引不申、次第ニ川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、年々御所務落猶百姓迷惑不大形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度、一」と記されている。真締川が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせてほしいという内容である。また、同文書中には、河口付け替え工事の結果、「一 弥水砂共ニ引宜ニ付、只今迄之川をは川尻留被申附候、一」とあり、付け替え工事によって川の流れが良くなったので旧河口を封鎖して耕地にしたいと萩藩に願^{註1}い出ている。

この文書から、18世紀末の真締川河口一帯の状況を窺うことができる。つまり当時の真締川が「土砂を多く流す川」であったこと、そしてその土砂により河口一帯は度々洪水に見舞われたため、氾濫原の様相を呈していたであろう、ということである。

小串構内は標高約3mと低く、既往の調査により大学造成時構内全域に1～1.5mの盛土が行われており、盛土直下に旧耕土が遺存していることが判明している。旧耕土下には粘土～シルト層が確認されるが、層内には近世後半を下限とする複数時代の遺物が混入している。上の文書から、小串構内も元来は耕作に不向きな土地であり、江戸時代後期の真締川河口の付け替えによりようやく土地が安定し、海生砂層や土砂が堆積した脆弱な砂層の上に床土となる客土を盛ることによって、耕作地とすることができたのだろう。

不安定な低地に立地する小串構内であるが、唯一丘陵に接触するのが今回調査を実施した構内北端部である。同地における初の発掘調査となり、集落遺跡等の発見が期待されたが、丘陵上面の削平が著しく、埋蔵文化財が遺存する状況に無かった。

小串構内は南西部に空地が少なく、開発は構内北東半部に集中することが予想される。集落等の発見は見込めないにせよ、堆積層中には縄文時代から近世までの多くの遺物を含んでいる。今後も埋蔵文化財の保護に十分な配慮が必要である。

【註】

1) 小川国治(1992)「第4編近世第3章近世村落の成立と発展」,宇部市史編集委員会(編)『宇部市史通史篇』上巻,宇部(山口)

2. 医学部地域医療教育研修センター新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 職員宿舎南方駐車場敷地

調査面積 約156㎡

調査期間 平成22年1月11日～2月14日

調査担当 横山成己 松浦暢昌

調査結果

(1) 調査の経緯(図37・38、写真67・68)

小串構内北東部、医学部職員宿舎南方の駐車場敷地において、医学部地域医療教育研修センターの新営工事が計画されたことを受け(平成21年度第13回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成22年3月23日開催)にて承認※旧事業名「(小串)コアセンター新営工事」)、建物建設予定地において予備発掘調査を実施する運びとなった。予備発掘調査対象範囲は、当地点周辺では既往の調査例が存在しないものの、平成16年から17年にかけて実施した医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査において職員宿舎周辺に濃密に遺物包含層が確認されていることから、建物建設予定地の北半部、約156㎡に定めた。

(2) 調査の経過(写真74)

調査は平成23年1月11日より着手した。2日間をかけて重機掘削を行い、造成土を除去し、13日には旧耕土上面を検出。この時点で現地表下約1.4mとなったため旧耕土上面で幅1.5mの犬走りを設け、以降南西スロープ側を除き「コ」の字状に側溝を下げながら下層を確認し、各堆積層の掘削を進めた。

2月4日までに第5層中まで掘削を進めたところ、遺物の出土が皆無となり、湧水も著しくなったために人力掘削を中止し、写真撮影を9日までに終了、平面・断面実測を11日までに完了した。なお、埋め戻し時に調査区南西端部を重機により深掘りし、第5層の層厚を確認した。

(3) 層序(図39、写真79・80)

今回調査では地表下2.4mまでの地層を重機と人力による掘削で確認し、地層は5層に区分された。

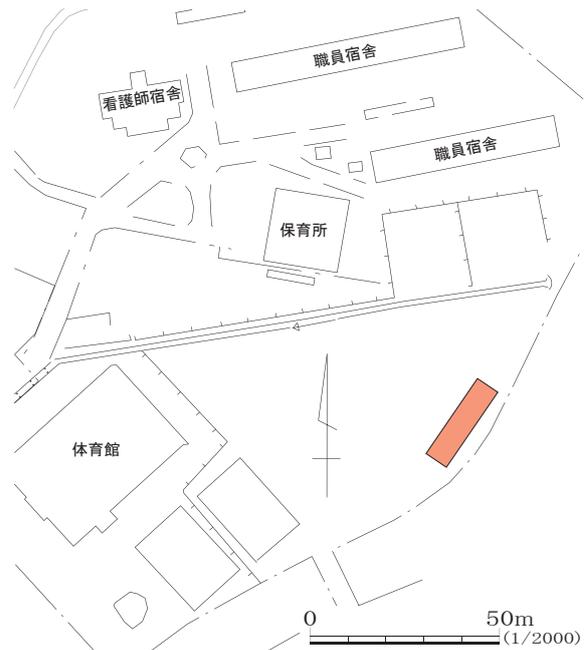


図 37 調査区位置図

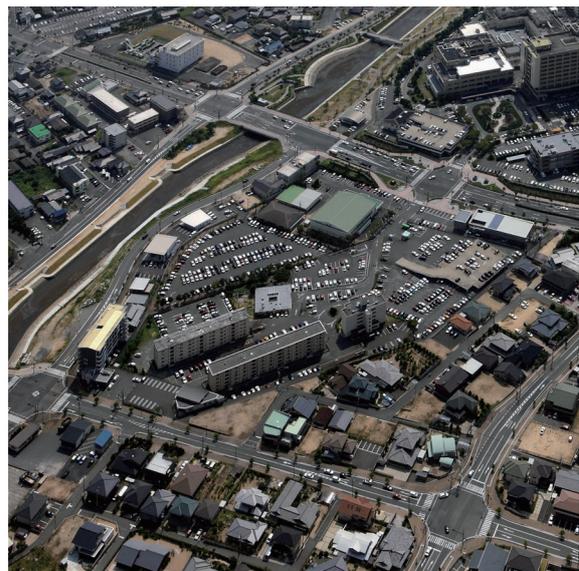


写真 67 調査前遠景 (北東から)



写真 68 調査前近景 (北西から)

第1層は現代の整地土層で層厚は約1.4mである。真砂土による整地であるが、トレンチの南側約14mでは深さ0.7m以下に石炭のボタの埋め立てがみられる。

第2層は黒褐～暗灰黄色の粗粒砂を少量含むシルト層で層厚はおよそ0.1～0.15mである。暗色を呈しており、トレンチ中央北側付近に杭列と掘込みを伴う畦畔が確認される他、それらと同一方向をとる踏み痕や植物の株が確認された。出土する磁器等の遺物と併せて近代の耕土と見られる。第2層の下部には層厚約0.01～0.1mの灰～オリーブ黒色含細礫粗粒砂混じり極細粒砂質シルト層が確認できる。この層は畦畔より北側には確認できず、畦畔から南側に向かって厚くなる傾向にあるが、明確な遺物の出土がなく堆積時期の推定は困難である。

第3層は第3-1層と第3-2層に分類される。第3-1層は黒灰黄色シルト質極細粒砂であり層厚は最大でも約0.05m程度である。薄く暗色を呈する層でほぼ同一標高に分布するが、上位層に削平され不連続な様相となる。土壌化が進行した水田床土の一部と見られる。第3-2層は灰オリーブ色シルト質極細粒砂層で層厚約0.1mとなる。第3-1層よりも砂質が減少する。耕地化に伴う客土と見られる。

第4層は砂質が多く混ざり始める層で、第4-1層から第4-5層に細分される。第4-1層は灰色シルト質粘土層で層厚は最大で約0.1mである。上層からの植物根の痕跡がみられる。第4-2層は灰オリーブ色粗粒砂～細礫混じり混じり粘質土シルト層で層厚約0.05～0.15mである。上層より植物根の鉄分を多く含み、南側ほど鉄分が増加する。南側へ緩傾斜している。第4-3層は灰オリーブ色極細粒～粗粒砂混じり粘土層で層厚約0.1～0.2mである。植物根の痕跡がみられる他、南側では禾本科とみられる植物遺体も若干含まれる。第4-4層は灰色細礫混じり粘土質粗粒砂層で層厚は最大で約0.2mである。植物根の痕跡を少量含み、南側で植物遺体をやや多く含む。第4-2層同様、南側に向かい層厚を増し、北側の分布は確認できなかった。第4-5層は灰色～暗オリーブ灰色の細粒～粗粒砂質粘土層で層厚は0.05～

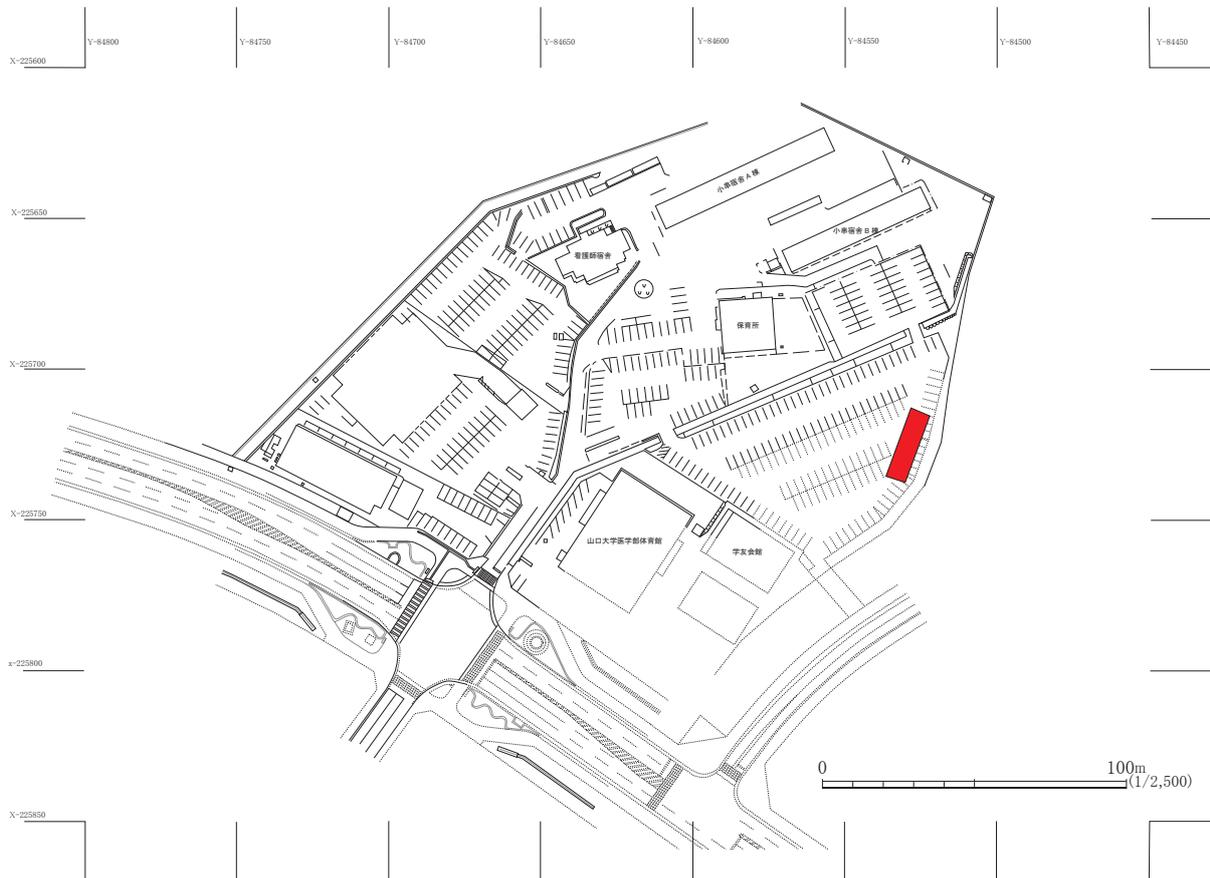


図 38 調査区詳細位置図

0.25mである。全体的に10cm大の粘土質の偽礫を含む。南側で植物遺体を多く含む。第4層は中世以前の土器類が出土するが、特に第4-3層と第4-4層の層境付近から、縄文から奈良時代の土器片の散布が多数確認された。

第5層は暗オリーブ灰色含粘土細粒砂～細礫層である。層厚はおよそ0.8m。第5層の人力掘削および重機掘削では遺物は確認されなかった。これより下層は重機掘削部において第6層と見られる灰色シルト質極細粒砂を確認したが、湧水と地面崩落の危険があったため断面精査を行わなかった。

(4) 遺構(図39、写真70～73)

第3-1層上面において、畦畔を確認した(写真71)。畦畔は幅約1m、高さ0.15mの規模で北西－南北方向に設けられている。また畦畔中央部には0.7～0.8m間隔で木杭が打ち込まれていた。畦畔をはさみ幅0.4～0.8m、深さ0.05mの溝が設けられていることも確認した。

この他、調査区南西部にて同じく第3-1層上面で東西に走向する溝を1条(SD1)検出した(写真72・73)。幅約0.7m、深さ0.15mを測る。埋土からは磁器7点、陶器16点、土師器または土師質土器13点が出土しているが、いずれも細片である。SD1は畦畔と方向を違えており、性格不明である。

(5) 遺物(図40～43、写真76・77・81～84、表5・6)

遺物は第2層から第4層にかけて出土している。第2層は大学造成前の旧耕土で、近世以前の遺物も含むが大多数は近代のものであるため本稿では省略する。

第3-1層出土遺物(図40、写真81・82)

2は磁器染付碗。外面に圈線を巡らせ文様帯を区画し、内部に菊花を上下反転させながら描く。内面は無文。口径は7.4cmに復元される。5は型押し貝殻文様の磁器紅皿。口径4.6cmに復元される。6は粗陶器の鉢。外面は瓦質焼成となっており、内面には自然釉がかかる。蓋受けの口縁は外方に張り出している。復元口径18.9cm、胴部最大径20.0cm。7は陶器底部片。底部外面は露胎、内面と外面上部に鉄釉がかかる。外面底部直上に胎土目が付く。復元底径10.0cm。8は陶器底部片。内外面とも露胎であるが、内面には薄緑色の自然釉がかかる。外面底部直上に胎土目が付く。復元底部径8.2cm。9も陶器底部片。底部は内外面とも露胎であるが、内面に透明の自然釉がかかる。体部外面には灰釉が掛けられている。10は陶器蓋天井部片。擬宝珠形のつまみを有する。つまみ径は1.9cmを測る。12は陶器挿鉢口縁部片。口縁端部を丸く肥厚させる。卸目は連続して施されている。15は土人形。正面上部を欠失しているが、持物と太鼓腹から布袋和尚を模ったものと見られる。部分的に赤色塗彩が残る。全長3.7cm、重量10.32gを測る。16は扁平な土製玩具。泥面子か。獅子狛犬と見られるが、阿形・吽形の判別が付かない。全長2.25cm、重量1.44g。17も同じく扁平な土製玩具。こちらも泥面子であろうか。平面形態楕円形で、中心に突線で四角形が描かれている。四角形の上下に薄く「天」の文字と「保」と見られる文字が刻まれていることから、天保通宝を模したものと思われる。全長2.05cm、重量1.06g。18は管状土錘片。残存長2.5cm、最大幅1.25cm、孔径0.45cmを測る。19は棒状石製品。全長3.45cm、最大幅0.45cmの棒状製品で、全面を丁寧に研磨し、両端を鈍く尖らしている。山口大学医学部構内遺跡では過去にも類似品が出土しているが、所属時期や用途が特定できない。20は煙管雁首。全長2.0cmと短い。重量1.9gを測る。

第3-2層出土遺物(図40、写真81)

1は菊花型の磁器染付皿。見込み二重圈線内に文様が描かれているが内容は不明。口径14.0cmに復元される。3は磁器碗。外面に山帰来文が描かれる。復元口径5.4cmとなり、猪口と見られる。4は合子

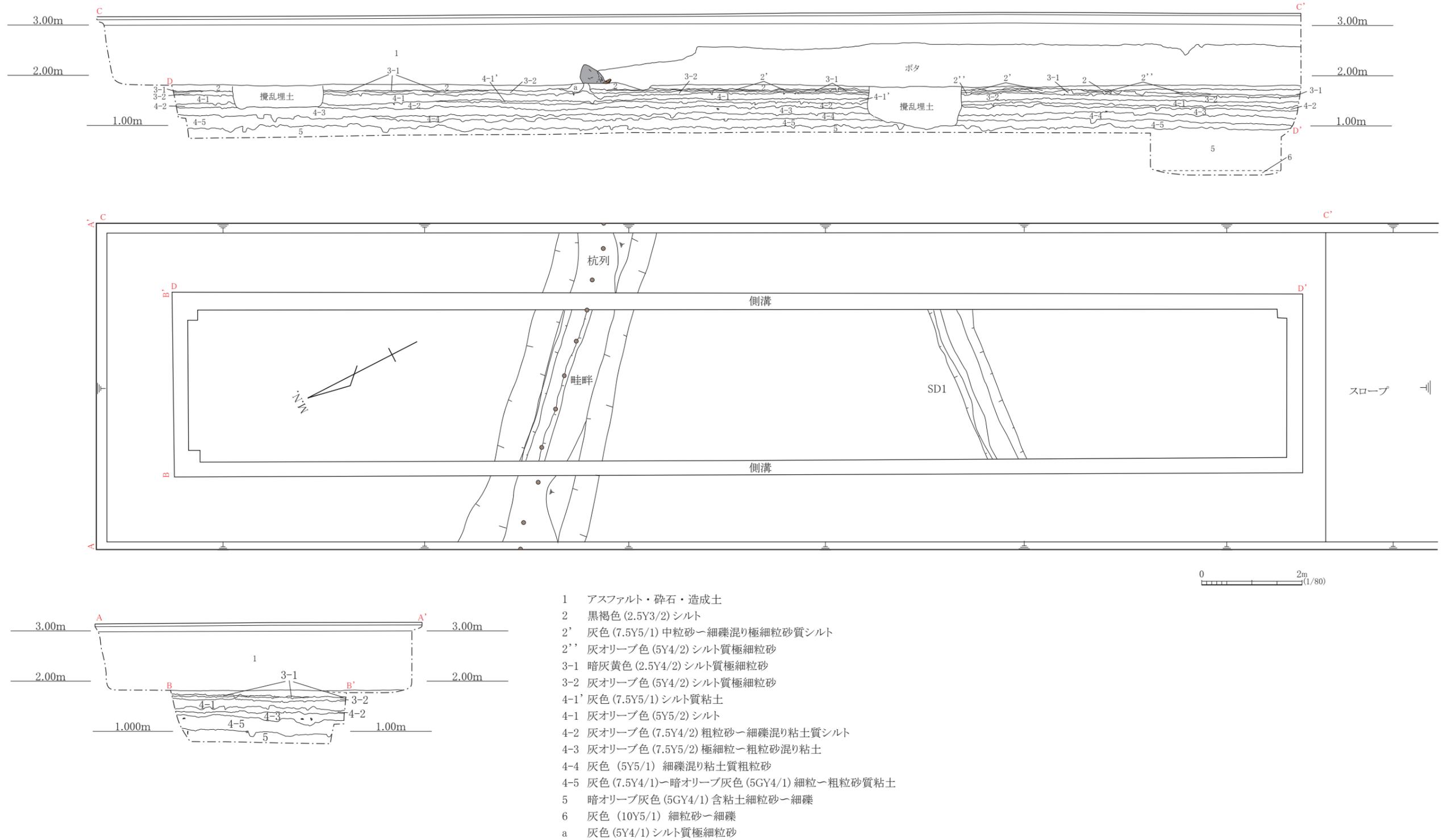


図 39 調査区平面図・断面図



写真 69 第2層検出状況 (南西から)



写真 70 第3-1層検出状況 (北東から)



写真 71 畦畔検出状況 (南から)



写真 72 SD1 検出状況 (南東から)



写真 73 SD1 完掘状況 (南東から)



写真 74 第3-2層掘削風景 (南東から)



写真 75 第4-1層検出状況 (北東から)



写真 76 第4-3層遺物出土状況 (南西から)

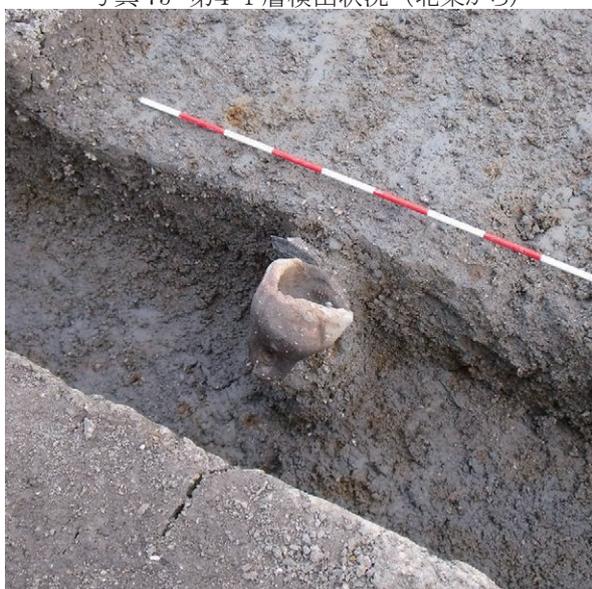


写真 77 第4-3層蛸壺出土状況 (南西から)



写真 78 掘削終了状況 (北東から)



写真 79 北東-南東壁土層断面 (南西から)



写真 80 南東壁土層断面 (北から)

の身。外面に漢字状の染付が見られる。器高2.1cm、小片のため口径復元不能。11は陶器蓋口縁部片。外面に鉄釉で波状に刷毛目が施される。香炉蓋か。13は陶器鉢口縁部小片。口縁端部を外方に折り返し突起させる。内面下端にわずかに卸目状の沈線が見られ、挿鉢と思われる。14は土師質土器の甕口縁部片。口縁外端を断面三角形状に肥厚させる。内外面ともにミガキ気味にナデ調整が施されている。小片のため口径復元不能であるが、大甕と見られる。

第4-1～3層出土土器(図41、写真82)

ここに報告する遺物は調査区側溝掘削中に出土したもので、所属層の特定が困難なものである。21は土師器坏。丸底気味の底部から直線的に体部が立ち上がる。体部外面には明瞭にロクロ水引き痕が残る。内外面とも風化が著しく器面調整の観察が困難であるが、体部内面には回転ナデが施されている。上半と下半で焼成具合が異なり、重ね焼かれたことが分かる。復元口径14.2cm、復元底径11.0cm、器高4.8cmを測る。22は土師器坏の底部、23は口縁部の小片である。前者は古代、後者は古墳時代中後期に所属する。24は弥生土器甕口縁部片。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁は短く外反する。体部外面にタテハケが施されている。25は土師器甕口縁部片。精選された胎土で、シャープなつくりである。外面はタテハケ後ヨコナデ、内面はヨコナデが施される。26も同様の特徴を持つ甕の口縁部片であるが、25に比して胎土が粗くつくりもやや粗雑である。27は須恵器坏身の口縁-体部片である。焼成不良で土師質となっている。28は須恵器口縁部小片。壺瓶類の口縁部と見られる。

第4-3層出土遺物(図42、写真82～84)

29は刻目突帯文土器の口縁部小片。30は縄文土器深鉢体部片。内外面に条痕が残る。31は弥生土器高坏口縁部片。強く外反する口縁で、坏との接合部で折損している。32も高坏口縁部片。31に比して大きく外方に開く。33は弥生土器甕口縁-体部片頸部を「く」の字状に屈曲させる。口縁端部は欠失している。34は壺口縁か。35、36は弥生土器底部と見られる。35は平底、36は上げ底である。37は甕体部片。外面に細かなハケが施される。38は土師器甕口縁-体部片。頸部を「く」の字状に短く屈曲させ口縁に至る。外面にタテハケが施されている。内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。39も土師器甕口縁-体部片。頸部から口縁部にかけて強く外反する。体部器壁に比して口縁は分厚く、内面に「×」状のヘラ記号を施す。40・41は土師器碗口縁部小片。42は釣り鐘型の蛸壺。当遺跡の初例である。口径6.3cm、器高9.1cmを測る。紐孔径約1cm。43・44は須恵器甕。43は肩部、44は体部片であり、両者とも外面に平行叩き痕、内面に同心円当て具痕が残る。45は須恵器坏蓋。口縁端部に段を有する。器面の状態が極めて良好である。やや焼き歪みが生じており、口径は14.2～14.9cm、器高4.9cmを測る。46は古代の須恵器坏蓋で、天井部稜線から径を復元している。扁平な器形で口縁はやや屈曲気味に外方に開き端部は丸く収めている。こちらも器面の状態が良好である。47は須恵器坏口縁部、48は見慣れぬ器形の須恵器であるが、鉢もしくは器台の口縁部と思われる。49は須恵器壺の底-体部片。外方に開く低い高台が底部外端に巡らされる。内部底面に灰を被る。高台内径10.2cmに復元される。

第4-4層出土遺物(図43、写真84)

50は土師器脚部片。器面の遺存状況が良く脚内面のハケ、絞り痕が明瞭に残る。51は土師器壺口縁部片。口縁端部をわずかに外反させる。52～55は土師器坏の口縁、底部小片。いずれも古代もしくは中世に所属するものである。

【註】

- 1) 横山成己(2006)「医学部職員宿舍他公共下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成16年度—』,山口 の図21-24

小車構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

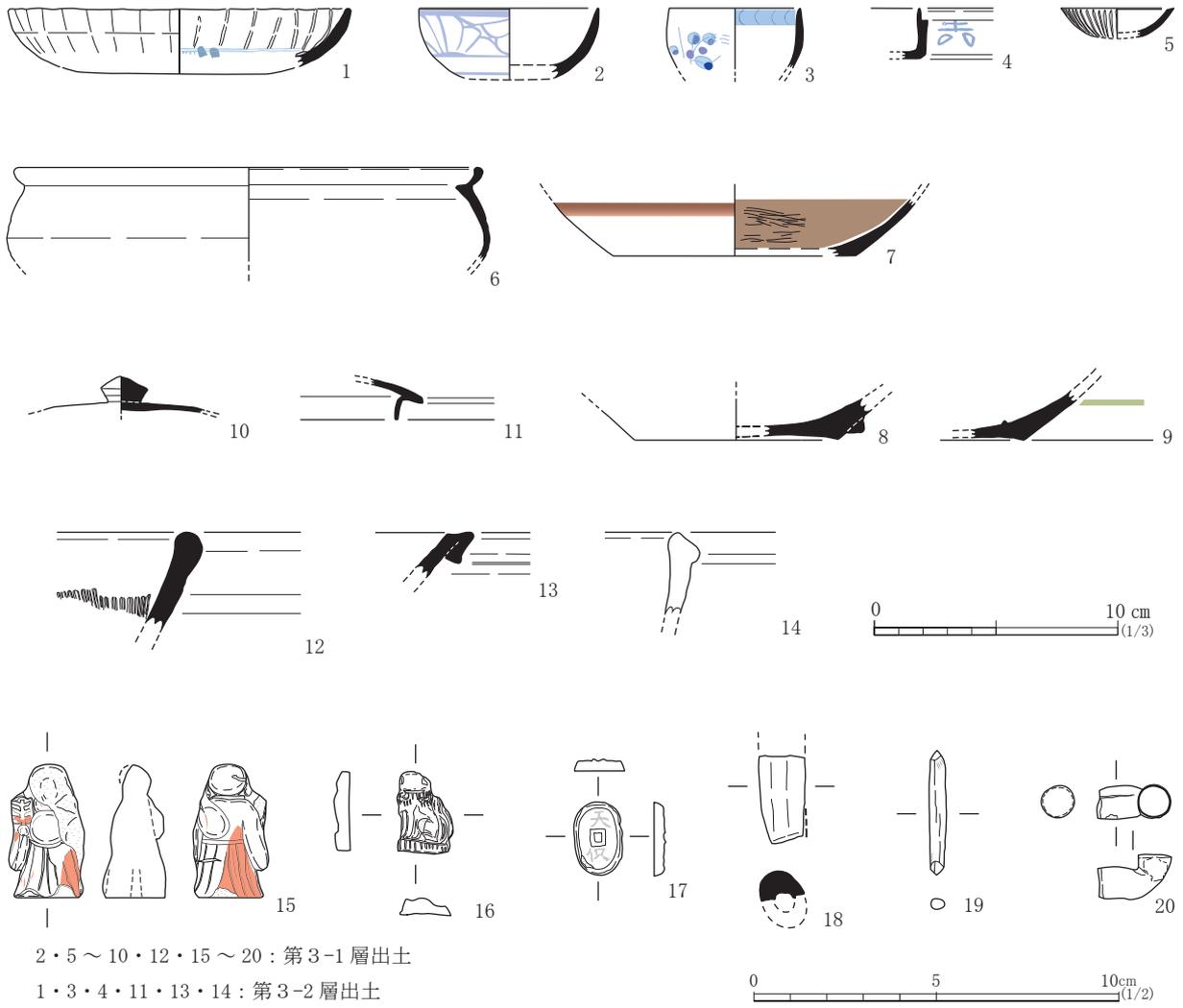


図40 第3層出土土器・土製品・石器・金属器実測図

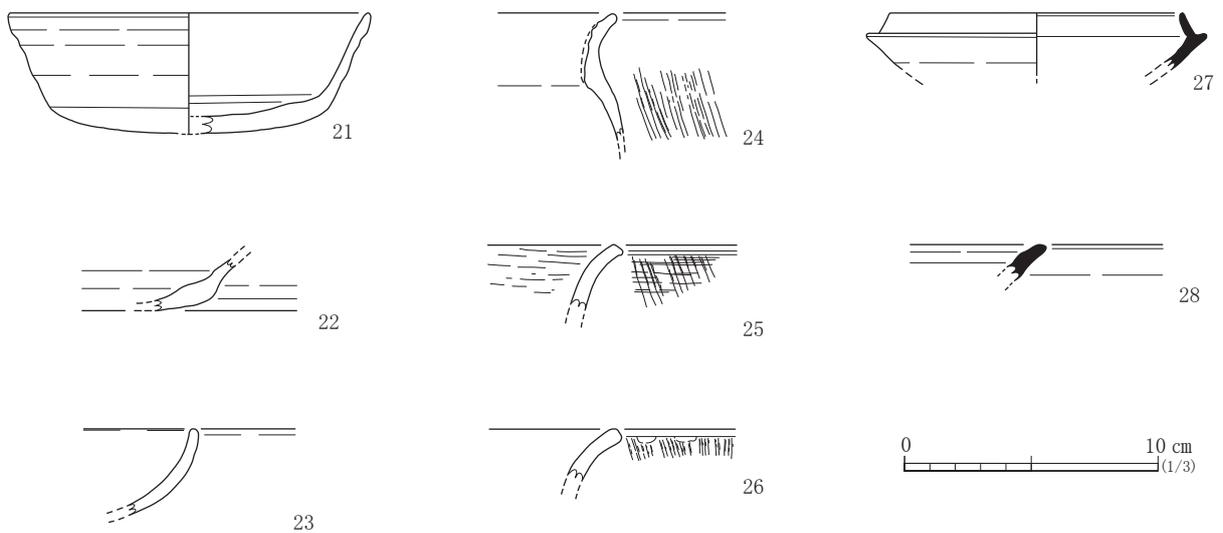


図41 第4-1～3層出土土器実測図

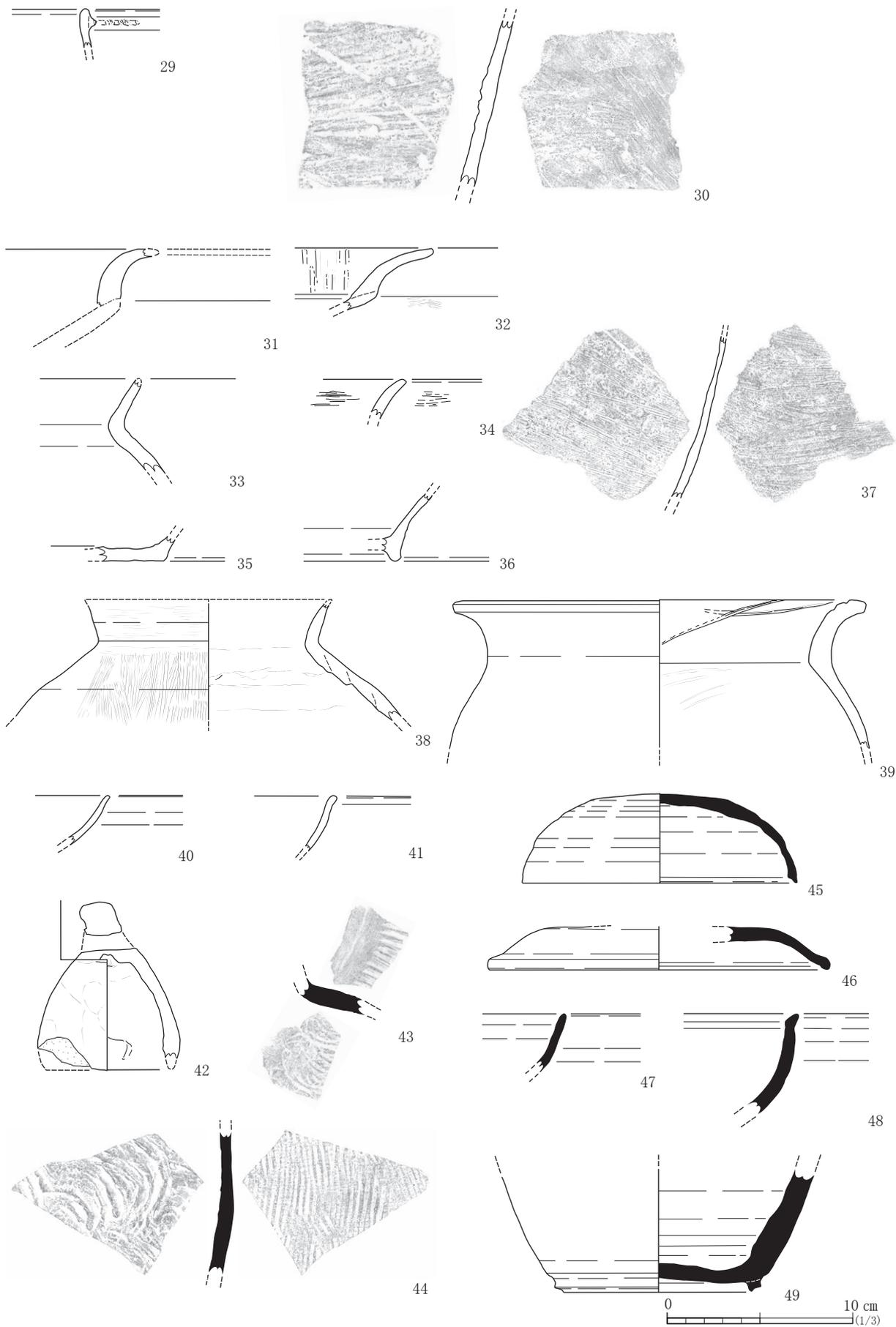


図 42 第4-3層出土土器実測図

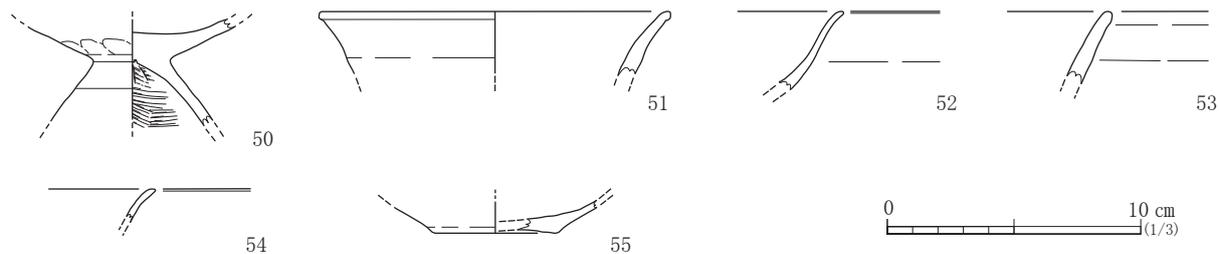


図 43 第4-4層出土土器実測図



写真 81 出土遺物①



15a



15b



17



18



19



20



22



23



24



25



26



27



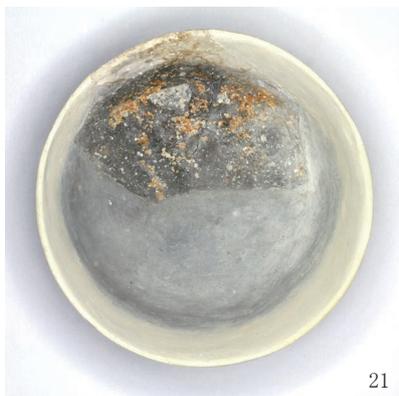
28



30a



30b



21



29



33

写真 82 出土遺物②



写真 83 出土遺物③

小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

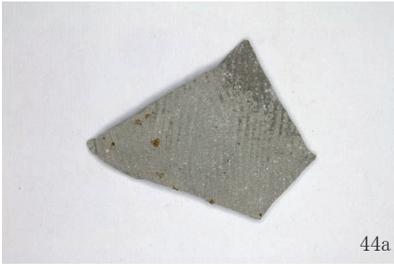


写真 84 出土遺物④

表5 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①口径②底径③器高				
1	第3-2層	磁器 菊花皿	口縁部	①(14.0) ③(2.7)		素地 白色 染付 藍色	精緻	見込みに砂 目が残る
2	第3-1層	磁器 碗	口縁部	①(7.4) 残存高 2.9		素地 白色 染付 やや薄い藍色	精緻	外面菊花文
3	第3-2層	磁器 碗	口縁部	①(5.4) 残存高 2.5		素地 白色 染付 青~青黒色	精緻	外面山帰来文
4	第3-2層	磁器 合子 身	口縁部	③2.1		素地 白色 染付 藍色	精緻	
5	第3-2層	磁器 紅皿	口縁部	①(4.6) 残存高1.2		素地 白色 釉薬 透明	精緻	
6	第3-1層	粗陶器 鉢	口縁部	①(18.9) 残存高 3.9 体部最大径 20.0		①暗灰色(N3) ②灰白色(2.5Y8/2)	精緻	
7	第3-1層	陶器 鉢か	底部	②(10.0) 残存高 2.35		素地 灰色(5Y7/1) 釉 ①褐色(7.5YR4/3) ②褐色(7.5YR4/3) ~黒褐色(7.5YR3/1)	精緻	
8	第3-1層	陶器 鉢か	底部	②(8.2) 残存高 1.7		素地 灰白色(2.5Y8/1) ②自然釉 オリーブ黄色 (7.5Y6/3)	精緻	
9	第3-1層	陶器 鉢か	底部	残存高 2.1		素地 灰黄色(2.5Y7/2) ①釉 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) ②自然釉 灰白色(5Y7/2)	精緻	
10	第3-1層	陶器 蓋	天井部	残存高 1.5 つまみ径 1.9		①釉 灰黄褐色(10YR4/2) ②素地 灰黄色(2.5Y6/2)	精緻	
11	第3-2層	陶器 香炉蓋	口縁部	残存高 1.7		素地 灰褐色(7.5YR5/2) 釉 浅葱色(2.5Y7/4)~ 黒褐色(7.5Y3/2)	精緻	擬宝珠 つまみを 有する
12	第3-1層	陶器 播鉢	口縁部	残存高 4.2		素地 灰色(N4) 釉 灰褐色(5YR4/2)	やや粗	鉄釉
13	第3-2層	陶器 鉢(播鉢か)	口縁部	残存高 1.9cm		素地 灰色(N5) 釉 暗赤褐色(5YR3/3)	精緻	鉄釉
14	第3-2層	土師質土器 大甕	口縁部	残存高 3.4		①②灰白色(2.5Y8/1)	密	
21	第4- 1~3層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①(14.2) ②(11.0) ③(4.8)		焼成良好部 ①②灰白色(2.5Y8/2) 焼成不良部 ①②黄灰色(2.5Y5/1)	密	
22	第4- 1~3層	土師器 坏	底部	残存高 2.1		①灰白色(2.5Y8/1) ②灰白色(10YR8/2)	密	
23	第4- 1~3層	土師器 坏	口縁部	残存高 3.5		①②灰黄色(2.5Y7/2)	密	
24	第4- 1~3層	弥生土器 甕	口縁部 ~頸部	残存高 5.1		①にぶい 橙色(5YR7/3) ②橙色(2.5YR6/6) 灰白色(5YR8/2)	密	
25	第4- 1~3層	土師器 甕	口縁部	残存高 2.6		①浅黄橙色(10YR8/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	密	
26	第4- 1~3層	土師器 甕	口縁部	残存高 2.1		①灰褐色(5YR6/2) ②明褐色(7.5YR7/2)	密	
27	第4- 1~3層	須恵器 坏身	口縁部 ~体部	①(7.5) 残存高 2.3		①灰白色(10YR8/1) ②浅黄橙色(10YR8/3)	やや粗	焼成不良
28	第4- 1~3層	須恵器 壺瓶類	口縁部	残存高 1.4		①②灰白色(10YR8/1)	やや粗	焼成不良
29	第4-3層	縄文土器 深鉢	口縁部	残存高 2.1		①②黒色(10YR2/1)	密	突帯文
30	第4-3層	縄文土器 深鉢	体部			①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密	条痕
31	第4-3層	弥生土器 高坏	口縁部			①明褐色(7.5YR7/2) ②にぶい 橙色(5YR7/3)	密	坏部との接 合面で剥離
32	第4-3層	弥生土器 高坏	口縁部	残存高 3.3		①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰色(5Y5/1)	やや粗	
33	第4-3層	弥生土器 甕	口縁部 ~頸部	残存高 5.1		①浅黄色(2.5Y7/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	密	
34	第4-3層	弥生土器 壺	口縁部	残存高 2.2		①②浅黄色(10YR8/4)	密	
35	第4-3層	弥生土器	底部	残存高 1.35		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	やや粗	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量 (cm)		胎土	備考
				①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面		
36	第4-3層	弥生土器 甕	底部	残存高 3.5	①灰黄色(2.5Y6/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	粗	
37	第4-3層	弥生土器 甕	体部		①黄褐色(2.5Y5/3) ②黒色(N1.5)	密	
38	第4-3層	土師器 甕	口縁部 ～体部	①(13.4)	①②オリーブ灰色(5Y6/3)	密	
39	第4-3層	土師器 甕	口縁部 ～体部	①(22.3) 残存高 8.0	①②灰白色(10YR8/2)	密	口縁内面に「X」字状へ 記号
40	第4-3層	土師器 埴	口縁部	残存高 2.7	①②灰白色(2.5Y8/2)	精緻	
41	第4-3層	土師器 埴か	口縁部	残存高 3.0	①②にぶい 橙色(7.5YR7/3)	やや粗	
42	第4-3層	土師器 蛸壺	口縁部 ～ 紐孔部	①6.3②9.1 孔径 1～1.1	①②灰黄色(2.5Y7/2)	密	
43	第4-3層	須恵器 甕	肩部		①灰色(7.5YR6/1) ②灰白色(N7)	密	
44	第4-3層	須恵器 甕	体部		①灰白色(N7)～灰色(N6) ②灰白色(N7)	密	
45	第4-3層	須恵器 坏蓋	口縁部 ～底部	①(14.2～14.9) ③4.9	①灰色(N4)②灰色(N5)	密	歪み有り
46	第4-3層	須恵器 坏蓋	口縁部	①(18.4) 残存高 2.4	①灰色(N6) ②灰白色(10Y7/)	密	
47	第4-3層	須恵器 坏身	口縁部	残存高 3.2	①②灰白色(2.5Y8/1)	密	
48	第4-3層	須恵器 鉢か	口縁部	残存高 5.4	①②灰色(N6)	密	
49	第4-3層	須恵器 壺	底部～ 体部	②高台内径 10.2 高台外径 11.2 残存高 6.7	①灰色(N4) ②灰色(N6)	密	
50	第4-4層	土師器 脚付鉢	鉢底部 ～脚部	残存高 4.3	①②浅黄橙色(7.5YR8/3) 部分的に赤橙色(10R6/6)	密	
51	第4-4層	土師器 壺	口縁部	①(13.8) 残存高 2.55	①②灰白色(2.5Y8/2)	やや粗	
52	第4-4層	土師器 埴	口縁部	残存高 3.1	①②灰白色(2.5Y8/2)	精緻	
53	第4-4層	土師器 坏	口縁部	残存高 2.9	①②灰白色(2.5Y8/1)	密	
54	第4-4層	土師器 坏か	口縁部	残存高 1.3	①②灰白色(2.5Y8/2)	精緻	
55	第4-4層	土師器 埴か	底部	②(5.0) 残存高 1.3	①②灰白色(2.5Y8/2)	密	

表6 出土遺物(土製品・石器・金属器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
15	第3-1層	土人形 布袋か	全長3.7 最大幅2.1 最大厚1.7 重量10.32g	部分的に赤色顔料が残る
16	第3-1層	泥面子か 獅子狛犬	全長2.25 最大幅1.4 最大厚0.5 重量1.44g	
17	第3-1層	泥面子か 天保通宝	全長2.05 最大幅1.3 最大厚0.3 重量1.06g	
18	第3-1層	土錘	残存長2.5 孔径0.45 残存部最大幅1.25	
19	第3-1層	棒状石製品	全長3.45 最大幅0.45 重量1.21g	チャート製か
20	第3-1層	煙管 雁首	全長2.0 高さ1.2 径0.92～0.94 重量1.90	

(6) 小結

当調査地は職員駐車場として長く使用されていたこともあり、地下の様相が不明確な状況にあった。今回の調査により、既往調査同様の堆積状況、遺物包含状況が確認されたことは大きな成果と言える。

堆積層の由来等に関しては前項小結に記しているのを省略するが、当調査の4層出土遺物に関しては多少の注意が必要である。出土した土器、特に古墳時代から古代にかけての土師器と須恵器は摩耗、風化が少なく、遠方から土砂とともに運ばれてきたとは考え難い。由来を近隣地に求めざるを得ないであろう。当地から最も近い周知の埋蔵文化財包蔵地は北方600mに位置する小串古墳群であり、未だ近隣に集落遺跡は確認されていないが、将来の発見を期待したい。